

資料 12：令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

補装具利用者支援のための資料作成

研究分担者 芳賀信彦 国立障害者リハビリテーションセンター 総長
研究協力者 藤原清香 東京大学医学部附属病院リハビリテーション部 准教授

研究要旨

昨年度、補装具利用者支援のための資料作成の第一歩として、資料に医療安全の考え方を取り入れることができるか、取り入れるとしたらどのような形が適切か、を検討する目的で、「患者参加型医療」に関する資料を検討し、患者が医療に参加することの適否や効果についてはまだ一定の見解がない状況であるが、「患者参加型医療」の考え方を取り入れ、ある程度統一性をもった内容を含めた資料を作成し、可能であれば複数のルートで適切にユーザに行き渡らせることが、補装具の適切なフォローアップ体制構築につながると考えた。そこで本年度、利用者および支援者が補装具の不具合や不適合を早期に認知するためのパンフレットを制作した。制作に際しては、利用者参加の意義を示す、破損や不適合が及ぼす影響を示す、特定の義肢装具に限らない、実例の写真を示す、チェックポイントを簡潔にまとめる、破損や不適合を生じた際の対応を示す、ことに配慮した。

A. 研究目的

われわれは令和 2 年度から 3 年度までの「補装具費支給制度等における適切なフォローアップ等のための研究」の中で、補装具製作事業者等（以下事業者）によるフォローアップの現状調査を行い、義肢装具等のフォローアップ体制が事業者により異なり、約 4 分の 1 の事業者ではフォローアップが行われていないこと、積極的に義肢装具等の状態を補装具の利用者（以下ユーザ）に問いかけている事業者が少ないこと、ユーザから不具合の連絡があった場合の対応が一定でないこと、一方でほとんどの事業者がフォローアップの必要性を認識していること、を明らかにした。またフォローアップを行っている事業者でも、その頻度は義肢が 6(0~60)ヶ月（中央値、（）内は範囲、以下同様）、装具：6(0~24)ヶ月、車椅子：8(0~36)ヶ月であり、フォローアップの間に何らかの不具合・不適合が生じる可能性は一定程度存在することが分かった。従って、どのようなフ

ォローアップ体制を取るにしろ、ユーザ側が補装具の不具合や不適合に気付くことが、適切な対応につながる可能性を高めることになる。

令和 4 年度には、補装具ユーザ支援のための資料作成の第一歩として、資料に医療安全の考え方を取り入れることができるか、取り入れるとしたらどのような形が適切か、を検討する目的で、「患者参加型医療」に関する資料を検討した。その結果、医療安全では患者参加が一定の効果を挙げており、この考え方を補装具のフォローアップに適用し、ユーザ支援のための資料作成を進めるのが適切と考えた。

そこで本年度は、利用者および支援者が補装具の不具合や不適合を早期に認知するためのパンフレットを制作した。

B. 研究方法

昨年度までの研究成果に基づき、利用者および支援者が補装具の不具合や不適合を早期に認知するた

めのパンフレットの内容の草案を作成し、関係する本研究課題の研究代表者、研究分担者、研究協力者との間で検討した。併せて、パンフレットに掲載する、補装具の不具合、不適合例の写真を本研究課題の研究者の協力を得て収集した。

パンフレットに掲載する内容を決め、レイアウト等を業者に依頼して案を作成したのち、改めて本研究課題の研究者、更には研究分担者が所属する施設の義肢装具士に意見を求め、修正作業を行った。

C. 研究結果

パンフレット制作に際しては、利用者参加の意義を示す、破損や不適合が及ぼす影響を示す、特定の義肢装具に限らない、実例の写真を示す、チェックポイントを簡潔にまとめる、破損や不適合を生じた際の対応を示す、ことに配慮した。

パンフレットのタイトルを「自分で気付こう！義肢や装具の破損や不適合」とした。文字の読みやすさに配慮し、A4サイズで4ページのパンフレットとした。1ページ目は表紙に相当し、義肢や装具の破損や不適合に自分自身で気付くことの意味を説明した。2-3ページ目では、破損や不適合について実例を交えて説明したうえで、「チェックすべきポイント！！」として、皮膚の状態、体の痛みや疲労感、義肢や装具の音、部品の破損や摩耗、について簡潔に説明した。4ページ目では、耐用年数と、破損や不適合が生じた際の相談先について説明した（別添資料）。

D. 考察

昨年度、患者・障害者側が補装具の不適合・不具合をどのように認知するのかが分からない、という問題があり、それを解決する手段として、補装具の不適合・不具合を医療あるいは福祉の安全の問題と捉え、「患者参加型医療」の考え方を取り入れる可能性を考えた。これは、医療安全に患者が参加するという考え方は、この20年で急速に広まっており、その適否や効果についてはまだ一定の見解がないものの、有効性も示されていることによる。少なくとも、利用者自身が補装具の不適合・不具合に関する

知識を身につけることにデメリットはないと考え、今回「自分で気付こう！義肢や装具の破損や不適合」というタイトルでパンフレットを制作した。補装具の種類は多いが、義肢と装具に関してはある程度統一性をもった内容を含めることが可能と考えた。今後はどのようなルートで適切にユーザに行き渡らせることが、適切なフォローアップ体制の構築につながるかを検討する予定である。

E. 結論

利用者および支援者が補装具の不具合や不適合を早期に認知するためのパンフレットを制作した。制作に際しては、利用者参加の意義を示す、破損や不適合が及ぼす影響を示す、特定の義肢装具に限らない、実例の写真を示す、チェックポイントを簡潔にまとめる、破損や不適合を生じた際の対応を示す、ことに配慮した。

G. 研究発表

1. 論文発表

Mano H, Noguchi S, Fujiwara S, [Haga N](#): Relationship between degree of disability, usefulness of assistive devices, and daily use duration: An investigation in children with congenital upper limb deficiencies who use upper limb prostheses. Assist Technol 35(2), 136-141, 2023

Mano H, Fujiwara S, Nishizaka C, [Haga N](#): Intellectual characteristics in children with congenital unilateral upper limb deficiencies. Cureus 15(4); e37100, 2023

2. 学会発表

[芳賀信彦](#): 障害者の自立支援とリハビリテーション医学、第60回日本リハビリテーション医学会学術集会、2023.7.1、福岡

藤原清香、真野浩志、梅崎成子、西坂智佳、小林美香、[芳賀信彦](#)、緒方徹: 遠方在住の先天性上肢形成不全児の当院における義手診療の特徴。第60回日本リハビリテーション医学会学術集会、福岡、2023、6。

Haga N: Functioning and assistive technology for people with disabilities in Japan. International Symposium on Rehabilitation Research 2023, Seoul, 2023, 9.

木村麻美、矢野綾子、芳賀信彦: 装飾用義手の手先に能動フックを用いピアノ演奏が可能になった先天性左前腕形成不全児の1例. 第39回日本義肢装具学会学術大会, 岡山, 2023, 10.

矢野綾子、中川雅樹、田中靖紘、中村康二、中村隆、大熊雄祐、芳賀信彦: 先天性片側上肢形成不全（フォコメリア）児に対する義手のリハビリテーションの経験. 第39回日本義肢装具学会学術大会, 岡山, 2023, 10.

藤原清香、西坂智佳、山本英明、真野浩志、芳賀信彦: 下肢切断者の更生用義足とQOL. 第7回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会, 宮崎, 2023, 11.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

無

2. 実用新案登録

無

3. その他

無